■扉写真　梶井基次郎
兵庫県川辺郡稲野村　謙一宅の庭にて
昭和六（一九三一）年一月・梶井謙一（兄）撮影
（日本近代文学館提供）

はじめに

生涯ただ一冊の短篇集を世に送り出し、結核のため才能を惜しまれながら満三一歳の短い命を終わった梶井基次郎（一九〇一〈明治三四〉～一九三二〈昭和七〉）。彼は、今でも根強い人気を誇る近代作家の一人です。特に作品「檸檬」は、武蔵野書院から出版された創作集の表題作となり、梶井文学の最高傑作に数えられることは、衆目の一致するところでしょう。自分を変えたくても変えられない青春期の焦燥を、みごと一顆の果実に封じ込めて間然する所のないこの作品は、現代国語の教科書にも採用され、文学教材の定番と言われてきました。作品は年々一定数の新しい愛読者を獲得し続け、特に若い世代に静かな共感の輪を広げながら今に至っています。

作者は文学に憧れる理系の高校生（旧制）として、一九一九（大正八）年九月から一九二四（大正一三）年三月まで四年半の学生生活を京都で送りました。健康と学業への不安を払いのけようと、自暴自棄になって遊興に明け暮れた京都での日々が「檸檬」の背景になっています。かろうじて三高を卒業し、晴れて東京帝大文科の学生となって文芸同人誌の旗揚げを企図した梶井は、その創刊号を飾るために、一九二四（大正一三）年の夏以降、京都生活の総決算を企図した大作の執筆に取りかかります。それがここにご紹介する草稿群です。

完成していれば、この作品こそが活字化された梶井の小説第一号になったはずでした。しかし、締切に迫られ、途中で梶井は作中に組み込む予定だった短いエピソードのみを取り出し、独立した短篇小説へと磨きあげることに専念します。こうして『青空』一九二五（大正一四）年一月創刊号の巻頭に掲載されたのが「檸檬」でした。幻の大作を「断念」した結果、それと引き換えに生まれたのが「檸檬」だったのです。

梶井の歿後、もはや永遠に完成されることのないその大作の草稿が見つかりました。遺作の整理にあたった友人の淀野隆三（一九〇四〈明治三七〉～一九六七〈昭和四二〉、フランス文学者）は、タイトルのないこの未完の草稿に「瀬山の話」という仮の名を与えて公表します（『文芸』一九三三〈昭和八〉年一二月）。「瀬山の話」はそれ以来、完成稿に近い下書き段階の「檸檬」を含み、梶井の「作品」としては最も長く読み応えのある習作として、全集やいくつかの作品集に収録され親しまれてきました。ところが、肝心の草稿は淀野が戦後に再訂版（『梶井基次郎全集　第一巻』一九五九〈昭和三四〉年二月、筑摩書房）を作成する際参照された形跡があるきりで、その後は所在不明となります。そのため、「瀬山の話」がどの程度直筆草稿の意図を汲んでいるのかが、長い間、検証不可能になっていました。

二〇一一（平成二三）年、実践女子大学は、神田神保町の八木書店からこの幻の草稿を購入しました。このことは当時、新聞にも報じられ、大きな話題になりました。これまで穴が開いていた「作家梶井基次郎」誕生の軌跡に、文献学から迫る希望の光が差し込んだからです。その草稿は、梶井が表現の試行錯誤に心血を注いだ痕跡に満ち、淀野の献身的な編集作業を経て活字化される以前の構想の原初形態をよく伝えるものでした。また、梶井の代表作「檸檬」のルーツと言える点でも、その資料的価値の高さは測り知れません。そのため、研究者や梶井文学のファンからは、影印出版への期待の声が、発見当初から数多く寄せられていました。

今回、一九三一（昭和六）年五月に短編集『檸檬』を出版したことで梶井とは縁の深い老舗書肆の武蔵野書院から、創業百周年を記念して、待望の影印出版が二種類の書籍として実現されることになりました。ひとつは、オールカラーの上製影印本『実践女子大学蔵　梶井基次郎「檸檬」を含む草稿群――瀬山の話――』（河野龍也編／栗原敦・棚田輝嘉・河野龍也解説）です。そしてもう一冊が、本書『梶井基次郎「檸檬」のルーツ――実践女子大学蔵「瀬山の話」』です。本書は、より手軽に梶井の直筆原稿を楽しみたいとの要望にお応えするために刊行するものです。モノクロ影

印の普及版ではありながら、翻刻の手法を変え、解説も改めてありますので、カラー版とは違った形で草稿の魅力に触れていただけると思います。

ここには約一世紀前、無名の文学青年が、原稿用紙の上で繰り広げた「言葉」との真剣勝負の物語があります。「檸檬」愛読者の皆様にも、また初めて梶井の作品に触れる皆様にも、一人の作家が誕生するまでの緊迫感に満ちたドラマを本書から感じ取っていただければ幸いです。

二〇一九年一一月一三日

編者識

62

「陽山」

「陽山」

「陽山」

「陽山」

「陽山――」

或は博士に。

先程の第十の私と第二の私はおた

私の中で分裂した。

その博士

疑惑を込めて私は

第二の私は

たと首をたれて泣くんいみた。

種々様々に呼んで見た。

然し何といふ変梃な変曲なんだらう。

一つは恨む様に、一つは叱る様に、一つは嘲る様に、一つ一つ過古(ママ)を持っており(ママ)、一つ一つ〔に〕記憶の中のシーンを蘇らしてゆく様だ。何といふ奇妙な変曲だ！

「瀬山」[400]

「瀬山」

「瀬山」

〔私〕

「瀬山！」此度は憐む様に。

先程の第一の私と第二の私はまた〔立ち上〕

私の中で分裂した。その憐む〔様〕〔気持〕声〔に無限の親愛を込めて私[402]は何度も〕に、第二の私はひたと首をたれて泪ぐんでゐた。

400…六二枚目

401…第一の私が呼びかける〔声〕

402…第一